様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０１１９８

研究課題名（和文）都市の記憶をめぐる創造と実践：芸術祭を通じた市民社会の形成に関する人類学的研究

研究課題名（英文）Memory and Creation : Anthropological Study on the Reorganization of Civil Society through Art Festival

研究代表者
越智　郁乃（OCHI, Ikuno）

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：１０６２４２１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では現代日本及びフランスの地方都市での文化芸術による地域振興事業を事例に、現代の市民社会のあり方について人類学的に探究した。具体的には、日本の新潟市と姉妹都市のフランス・ナント市において共に行政主導で開催される芸術祭（現代芸術の祭典と関連事業）を例に、公共空間での作品制作、観覧、管理を通じた行政、作家と市民との交渉や、観覧客の見るという行為を含みながら、いかに土地/人/出来事の「記憶」が選択・表現され、共有/拒否されようとしているのかを明らかにすることで、現代の市民社会がどのように形作られようとしているかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
二芸術祭を通じて地域文化表象や地域資源の再解釈が行われ、そこに主体的に関与する作家・市民が協働しながら自他の記憶を作品に昇華し、それがまちづくりへと発展している。しかしそれらは市政や芸術監督の強い権限下にあることに注意すべきである。特に日本では市民主体の芸術祭が称揚されるが市民と芸術祭のディレクション側は対等ではなく、強い権限なしに芸術祭の継続もない。一方ナント市では芸術祭を通じて都市再開発や都市計画に関わる職能集団が育ち、公的な教育にも発展していることから、芸術祭の枠組みを超えた関与者の増大が伺える。これは日本の芸術祭を通じた地域振興、文化芸術政策への大きな示唆であり、本研究の成果である。

研究成果の概要（英文）：This research explores anthropologically how civil society is shaped through local development projects related to art and culture. Empirically, we compare two cases of contemporary art festivals and related projects organized by city governments in Niigata City, Japan and Nantes, France. The main research questions concern (1) the relationship between the government, artists, and citizens in the production, viewing, and management of artworks in public spaces, and (2) how the "memories" of the land, people, and events are selected and expressed, including the act of viewing by visitors, and (3) how these memories are shared or rejected.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：観光まちづくり　芸術祭　アートプロジェクト　過渡期の都市計画　地域文化　記憶

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）研究の学術的背景と研究課題の核心をなす問い

現在、日本各地で現代芸術の祭典（以下「芸術祭」）やアート・イベントが氾濫している。2000年に始まった「大地の芸術祭　越後妻有トリエンナーレ」（新潟県）を端緒に、展示は従来の美術を支えてきた美術館やギャラリーなどの展示空間から公共空間へ移動した。近年では、地域や社会の特質を作家が作品の構成要素に組み込み、そこで生まれる関係性そのものを作品にする取り組みが行われるようになった。それを受け、芸術祭を主宰する行政側も次第にまちづくり予算を用いて事業を行うなど、地域再生のためにアートが用いられる事例が増加した[神野2016]。例えば、芸術祭の作品展示に向けて、行政側のコーディネートにより利用可能な公共空間が設定される。そこで作家が市民とのワークショップを通じて「地域文化」としてその地の「記憶」を掘り起こして、作品化する。その制作と展示を通じて「記憶」が「物語」として市民に共有されることで、「地域のつながり」の構築が意図されるのである。

しかし申請者の知見によると、単一の物語化に収斂しない市民活動が芸術祭の中で生まれている[越智 2014]。東京五輪開催と相まって増え続けるアート・イベントに対し、社会学を中心に社会・コミュニティとアートの関係を問う議論[北田他編 2016 など]が興隆する。これらの議論をより発展させるためには、現場での行政と作家と住民のやりとり、特に「記憶をめぐるせめぎ合い」について捉えるべきであると考えたことから、本研究を着想した。

（２）本研究の目的および学術性独自性と創造性

これまで「記憶の場」形成や「記憶をめぐるポリティクス」については、戦争や紛争時の「集合的記憶」を中心に議論されてきた。集合的記憶は人々を統合し、また差異や区別、分断をも作り出す。特に過去の戦争認識を巡って論争が起こり、既存体制に異を唱える対抗的な記憶形成がみられる。しかし記憶は支配や権威獲得や政治闘争のための道具としてのみ捉えられるものではない。酒井は過去を想起し解釈するとき、主体が一つの社会的実践と創造行為に携わっている側面に目を向けるべきだと指摘する。記憶とは前後の文脈すなわち歴史性と、人同士、人と土地/場所、人と事物との物質性を伴う生きた社会関係の中ではじめて立ち現れるものではないだろうか[酒井 2015]。

このような記憶をめぐる議論は、芸術作品をめぐる人類学的研究にも重なりをみせる。ジェル[GELL1998]は、西洋由来の美術制度や審美体系によらず、作品は反応や行為を引き起こすいわば人の行為を媒介するもの（agency）であると捉えた。社会的なエージェント（agent）たる作品が、制作者である人の行為を拡張し媒介することで、作品の周辺には複雑なネットワークが生まれる。芸術や芸術作品を通じてつながる人の社会関係こそ、芸術や芸術作品を成り立たせるために重要であるという。それに対してインゴルド[2017]は、結果や対象として作品を見るのではなく、生産の過程における創造性が重要だと指摘する。制作を始点に作品が「もの」として成長・生成する過程で、作り手たる実践者の身体の運動感覚＝「生」の動きと世界との correspondence、すなわち、応答や対応あるいは調和を重視すべきであると指摘した。

これら議論を基に、本研究では作品を通じた記憶の受動性と能動性の交錯点、すなわち芸術祭という「祝祭空間」とその利用に現れる人々の「記憶をめぐる創造と実践」を明らかにすることで、現代の市民社会の在り方を考察すべきであると考えた。都市空間形成の側面から見ると、常設を目的とした美術鑑賞の場に限定されない芸術祭では、公道や公園、遊休地や老朽建物等の公共空間が展示空間として再構成される。そこで作品に「土地/人/出来事の記憶」が表現され、市民・行政の双方にとって都市空間の「利用の記憶」が生まれる。それはいかに相互作用し、社会に応答・調和しているのだろうか。特に日本では近年、地域再生の推進に向けて多様な公共空間の使用ニーズに応えることが、地方自治体に求められている（内閣府地方再生推進事務局、2004年「地方再生推進のためのプログラム」等）。「柔軟な都市空間再生利用」という名の下で市民・行政に社会空間改変を促す共通意識の形成に対し、本研究は日本内外の地方都市の事例比較を通じ、芸術祭及び作品を「作る、使う、残す」現場の多様な実践者の視点から新たな社会を形作ろうとする動きについて明らかにすることに独創性があり、今後の社会の創造にむけた政策立案にも積極的にアプローチするものである。

２．研究の目的

以上を踏まえ、本研究では現代日本及びフランスの地方都市での文化芸術による地域振興事業を事例に、現代の市民社会のあり方について人類学的に探究した。具体的には、日本の新潟市と姉妹都市のフランス・ナント市において共に行政主導で開催される芸術祭（現代芸術の祭典と関連事業）を例に、公共空間での作品制作、観覧、管理の中で生じる「記憶をめぐる創造と実践」、すなわち作家と市民との関与や、一過性の観覧客の見るという行為を含みながら、いかに土地/人/出来事の「記憶」が選択・表現され、共有/拒否されようとしているのかを明らかにすることで、現代の市民社会がどのように形作られようとしているかを考察した。

３．研究の方法

研究方法は、現地調査（参与観察とインタビュー調査）と、文献・理論研究に大別する。

現地調査の対象は、(A) 新潟市「水と土の芸術祭」(以下、「水土」) (B) 地方分権が加速するフランスにおいて、文化芸術による都市復興を進めてきたアトランティック＝ロワール県ナント市の夏季芸術祭“le Voyage à Nantes（「ナントへの旅」、以下「LVAN」）”である。本研究は文化人類学的研究を基礎に、都市の公共空間の利用という都市工学的な側面に注目する。そのため、都市工学・景観法を専門とし、建築・景観に関する法律規則に精通した川崎修良氏を分担者に迎え、共同調査・研究を推進した。

４．研究成果

（１）記憶をめぐる創造と実践：二つの芸術祭を通じて

本研究では、まず以下の三点から二つの芸術祭を調査・研究した。①芸術祭をめぐる公共空間利用の実態と変遷。②作品制作においてどのように、またいかなる「記憶」が表現/捨象されるのか。③、①②を経ていかなる形で展示の場が人々に開かれ、「記憶」が共有/拒否されるのか。

(A) 新潟市「水と土の芸術祭」(2009 年-2018 年)

①トリエンナーレ形式の「水土」は、ＪＲディスティネーションキャンペーンや新潟が舞台となった大河ドラマの放映、また同じく新潟県で開催される「大地の芸術祭」に会期を合わせ、「大観光交流年」と位置付けられた 2009 年に当時の市長・篠田昭が開始した政治主導の芸術祭である[橋本 2012]。初回は市長が招聘したアートディレクター北川フラムによりランドアート型芸術祭としてディレクションされた。芸術祭期間展示に加え、屋外常設作品も市内各所に配置された。広域合併により広がった市域内で、市民が「共有できる物語」がない新・新潟市にとって、対外的にアピールできるイメージづくりは急務であった。芸術祭は、全市的な取り組みで市民が広くなった市域を知り、対外的には芸術の街・水と土に育まれた豊かな街として発信できる取り組みとして進められた[橋本 2012]。北川選定による美術作家による作品展示以外にも、「企画提案イベント」「地域イベント」という名称で市の助成による市民参画がなされたが、当時それらはアートプロジェクトとはみなされてない。北川氏の解任によりディレクターが変わり、2 回目の芸術祭の方向性が模索された結果、「市民プロジェクト」という形で、市民が企画実施するアートプロジェクトが開始された。②市民プロジェクトでは、芸術祭の枠組みで市民団体が自ら、あるいは美術作家とともに企画・制作・展示を行う、つまり市民がキュレーションするアートプロジェクトである。その中で、空き家となった町屋や老朽化した役場の利用、コミュニティの空地に作品設置がなされ、日本海や川、潟といった自然・地理条件の下で形成された新潟市内に点在する在郷町のかつての賑わいへの懐かしさ、湿田での困難な農作業など、個々人とコミュニティの「記憶」が交錯する形でそれがコンセプトになったり、作品の中に折り込まれたりした。また、実際の制作に住民が参加した例もある。③後述するようにトリエンナーレ形式の芸術祭は、2018 年が最後になった。野外常設作品は、作品に使用される素材にも大いに影響されるが、木材を用いたものは 10 年経たず撤去されている。また金属や石を用いた作品は残されているものの、芸術祭の存在とともに忘れ去られつつある。市民プロジェクト助成は継続されたものの、場の存続がプロジェクト存続の鍵となっている。適当な空き施設でも老朽化により取り壊れた場合、プロジェクト自体が続かない例がある一方で、コミュニティ施設としての機能を持たせて場を存続させ、市以外の助成金も組み込むことで活動を継続、または他地域のアートプロジェクトと連携した例もある。しかし、地域内では現代アート活動よりもまちづくり団体として認識され、芸術祭そのものへの評判は高くない[越智・鍋倉 2021]。

(B) フランス、ナント市夏季芸術祭“le Voyage à Nantes” (2012 年-)

①ロワール川沿いに位置し 18 世紀の奴隷貿易による舟運業で急激に発展したナント市は、1980 年代に造船業が閉鎖された後、経済的に衰退した。80 年代後半、市が経済発展の梃子として文化芸術を活用し、公共空間での大規模な芸術イベントの開催を奨励した。ジャン＝マルク・エロー市政において、第一期：芸術イベントの増殖、第二期：制度化、第三期：住民のライフスタイルの中心に芸術を置くことによって都市を構想する、の三段階を経た都市政策の進化がみられる[Gangloff2017]。第一期には市長が設立した文化開発研究センターの芸術監督に、後に LVAN の芸術監督になるジャン・ブレーズが就任した。この時期から旧造船業の有休施設のリノベーションが図られ、その後のナントの象徴的な集客施設の一つになった。第二期には、大道芸集団ロワイヤル・ド・リュクスの誘致と公道を舞台にした劇場パレード、及び機械仕掛けのアトラクション「マシン・ド・リル」を備えた都市公園が旧造船施設を利用して設置され、ロワール川流域自治体を繋ぐ芸術祭エスチュエールが政治主導で開催された。ナント広域都市圏自治体観光局、エスチュエールの運営機関が統合されて誕生したのが、芸術祭と同名の地方公共会社 LVAN（2011 年設立）である。②芸術と文化を都市の中心に据えて地域の魅力を発展させ、関連事業の運営を一体化させる目的をもったこの団体では、ナントを「突出した遺産に欠くが過去の文化政策で特徴付けられた都市である」と認識している。故に 2012 年から開始された LVAN 芸術祭では、文化遺産に焦点を当てるのではなく、他ではみられないものを見られる都市としてユーロ圏に情報発信をしている。バカンス時期に開催される芸術祭では、ナントの中心市街地に地

元文化や場所の特性に因んだ現代アートが展示される。設置場所は事務局が選定し、そこに作家を招聘する。作品は常設、期間展示、既存作品の取り込みに類型化される。上述したように文化遺産に欠くという認識のもと、施設や展示される作品に歴史性が表現されるのではなく、現在の風景や市街地との関係に再考を促すような視点が組み込まれている[越智・川崎 2020]。③トリエンナーレ方式・有料展示を含む水土と比較すると、LVAN は基本的に毎年開催・無料である。年毎に中心市街地から次第に郊外へと増殖する作品は LVAN 事務局によって維持管理され、作品は都市景観の一部となりつつある。このような状況に対して、LVAN を研究するセノグラフィ研究者ガングロフは、住民がアートに慣れることで作品と人々、地域との関係ついて投げかけられた問いが消えてしまうことを危惧する。また、イベントの制度化によって行政が演出家の役割を担い、アーティストが不在になると摩擦や衝突に欠け、都市づくりにおいて芸術的な創造性が遠ざけられることで「ディズニーランド化」する懸念を指摘する[Gangloff 2021]。

（2）芸術祭をめぐるポリティクスと市民参加

芸術祭をめぐる創造と実践を調査する中で課題として上がってきたのが、アートプロジェクトのディレクションという「権力」の問題である。社会学者の宮本は、北川フラムのディレクションによる「大地の芸術祭」「瀬戸内国際芸術祭」を事例に、「成功した芸術祭」で何が生まれ、何が消費されているのか、地域住民がどのような役割を担うのかを考察し、アートによるコミュニケーションを通じた新たな環境の創出や、観光の場面における住民自らの主体性の確立が見られると述べる[宮本 2018]。初回の水土 2009 は同じ北川のディレクションであったが、彼の解任後、水土 2012 から始まった市民プロジェクトの市民キュレーションでは、その余地がない「大地の芸術祭」「瀬戸内国際芸術祭」と比較すると、市民と作家、デイレクターとの対等な関係の構築が伺える。しかしながら、退任を控えた市長自らが水土 2018 においてトリエンナーレ形式での芸術祭の終了宣言を行ったことから、トリエンナーレでの助成の枠組みがなくなった。新市長は「市民の取り組み」として、トリエンナーレ終了後も助成を継続したが、コロナ禍も重なり、活動は縮小している。

以上のことから、日本における自治体主催のいわば「官製芸術祭」において目的や手段とされがちな「市民の主体的な活動」と、アートディレクターの「強い」ディレクションによる芸術祭の存続は、実際のところ両立が難しいものであることが分かる。宮本[2018]が指摘する新たな環境の創出や、住民の主体性というのは、実はディレクターの強い権限の下で作られていることに留意しなければならない。

（3）他部局・他団体との連携、教育機関への波及

LVAN においては、ジャン・ブレーズを含むアートディレクターらによって設置場所や作家の選定が行われることからも、「強い」ディレクションの影響が伺える。故に参加作家の離脱や在住作家による LVAN への批判も存在し、反 LVAN とまではいかないが、LVAN とは異なるアプローチであることを明確にして作品発表する作家や団体も存在する。このことから、一見 LVAN のアートディレクションに市民が参画する余地はないように思われるが、他部局・他団体との連携とそれを通じた職能者の育成がなされることで LVAN の関与者が増えていることが調査から明らかになった。

例えばナント市緑地環境局は、観光関連部局のように公式に LVAN に組み込まれた部局でないにも関わらず、積極的に企画提案を行う。LVAN 開始時には、緑地環境局の管轄下にある植物園は LVAN のルートの一部として組み込まれていたに過ぎなかったが、現在では植物園の植生や設置遊具にアーティストが関わり、LVAN の作品としてナンバリングされている。また LVAN 作品に緑地環境局が植物を提供するなど協力関係が築かれている。また、LVAN にアートプロジェクトとして参加し、有休施設で展示を行ってきた団体が、ナント広域都市圏の助成を得て、市内の食肉処理場跡地の宅地開発に先駆けてプロジェクトを立ち上げ、そこでの文化芸術プログラムを通じて将来の都市像にアプローチしている[越智・川崎 2020,川崎 2021]。

職能集団の育成は、公教育にまで拡大する。LVAN を通じて再開発が進むナント島というロワール川の中州に大学を構えるナント国立建築大学では、芸術舞台の演出技術が都市デザインに転用される技法を「都市のセノグラフィ」として理論化し、教育に取り入れている。LVAN の初年から、大学の研究室によるプロジェクトとして作品が展示され、また、2015 年にはロワイヤル・ド・リュクスの野外演劇プログラムに学生の課題で舞台装置の提案がなされ、共同制作として大学の名前がクレジットされた。LVAN と大学は協力関係を基礎に、大学ではアートプロジェクトと連携した大学教育を行い、公的人材育成を進めている[川崎 2021]。

以上のことから LVAN は、都市においてボランタリーではなく職能集団を育成するエージェントと見なすことができる。しかしこれは LVAN が意図して進めたというより、エロー市政以降の文化芸術政策が都市計画に結びついたことによる。とりわけフランスにおいて 2010 年以降拡大する「過渡期の都市計画(urbanisme transitoire)」は、都市開発において具体的な目標のためにプロジェクトを編成するのではなく、その過渡期においてアクターの参加を促し、そこから

求められる都市のあり方を模索することを意味するが[越智・川崎 2020,川崎 2021]、LVAN のように流動性を持ち、資源の再解釈を促す芸術祭の手法とほどよく合致しているのだ。

（4）今後の課題

以上のように、自治体の主催する芸術祭は単なるイベントではなく市民を動員しつつ行われる都市開発の一つとして見なすことができる。しかしながら新潟市のようにトリエンナーレ形式の芸術祭がなくなった都市において、芸術祭をベースにした市民の主体的な活動がいかに継続発展しているかが、今後の検討課題となるだろう。また、市政に組み込まれ、地域連携に発展している LVAN における「強い」ディレクション、及び「与えられる」アートと市民との関係の行方についても継続して考察することで、芸術祭による長期的な市民社会の変化について今後も注視する必要がある。

[参考文献]

Gangloff, E.
2017 “Quand la scénographie devient urbain: Nantes comme observatoire des fonctions du scénographe dans la fabrique de la ville”, Architecture, aménagement de l’espace. Université d’Angers, France
2021「ナントの文化的・都市計画的アイデンティティとなったセノブラフィ」髙田祐輔訳、川崎修良・越智郁乃編『URP 先端都市研究シリーズ 24 創造都市における文化プロジェクトの担い手：フランス・ナント市と京都市を例に』大阪市立大学都市研究プラザ
GELL, Alfred 1998 Art and Agency：An Anthropological Theory. Oxford University Press.
橋本啓子
2012『水と土の新潟　泥に沈んだ美術館』アミックス
インゴルド,ティム
2017『メイキング－人類学・考古学・芸術・建築』金子遊・水野友美子・小林耕二訳、左右社
神野真吾
2016「公共（性）とアート－「社会の芸術」の実現にあたって」北田暁大・神野真吾・竹田恵子編『社会の芸術/芸術という社会』フィルムアート社
川崎修良
2021「文化芸術による都市政策から公教育へ：フランス・ナント市における都市のセノグラフ教育の実践」川崎修良・越智郁乃編『URP 先端都市研究シリーズ 24 創造都市における文化プロジェクトの担い手：フランス・ナント市と京都市を例に』大阪市立大学都市研究プラザ
宮本結佳
2018『アートと地域づくりの社会学　直島・大島・越後妻有にみる記憶と創造』昭和堂
越智郁乃
2014「芸術作品を通じた人のつながりの構築と地域活性化の可能性―新潟市における芸術祭と住民活動を事例に―」『アジア社会文化研究』15
越智郁乃・川崎修良
2020「都市計画と観光まちづくりの横断に向けて―フランス・ナント市のアートプロジェクトを事例に－」『立教大学観光学部紀要』22
越智郁乃・鍋倉咲希
2021「第 8 章 芸術祭のフィールドワーク―学生の調査から観光まちづくりを問いなおす」市野澤潤平 ・碇陽子・東賢太朗 編『観光人類学のフィールドワーク:ツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房
酒井朋子
2015『紛争という日常－北アイルランドにおける記憶と語りの民族誌』人文書院

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 越智郁乃・川崎修良	４．巻 22
２．論文標題 都市計画と観光まちづくりの横断に向けて―フランス・ナント市のアートプロジェクトを事例に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 立教大学観光学部紀要	６．最初と最後の頁 52-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00018754	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 越智郁乃	４．巻 第21号
２．論文標題 民俗資料としてのアート－沖縄市コザ十字路絵巻とガイドツアーを例に－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 立教大学観光学部紀要	６．最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00017701	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 越智郁乃・川崎修良
２．発表標題 占拠しあう街とアート ―フランス・ナント市Le Voyage a Nantesを事例に―
３．学会等名 第92回日本社会学会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 川崎修良・越智郁乃　編	４．発行年 2021年
２．出版社 大阪市立大学都市研究プラザ	５．総ページ数 71
３．書名 URP先端的都市研究シリーズ24 創造都市における文化プロジェクトと担い手育成：フランス・ナント市と京都市を例に	

１．著者名 市野澤潤平 ・碇陽子・東賢太朗 編	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 312
３．書名 観光人類学のフィールドワーク:ツーリズム現場の質的調査入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	川崎　修良 (KAWASAKI Nobuyoshi) (60726884)	長崎県立大学・地域創造学部・准教授 (27301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 国際シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画　京都の試みとフランス・ナント市の『過渡期の都市計画』の対話を通した芸術祭の役割とその展望」	開催年 2020年～2020年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	グルノーブル・アルプ大学アルプ都市計画学・地理学研究所 PACTE研究機関	ナント国立建築大学AAU-CRENAU研究所		